

令和2年度入学 推薦入試（一般、専門高校・総合学科）試験問題の出典

社会福祉学部

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	—	丹野 智文	丹野智文 笑顔で生きる 認知症とともに	文藝春秋, 2017年より pp.10-15	文藝春秋

令和2年度 推薦入試（一般，専門高校・総合学科）

社会福祉学部

小 論 文 (90分)

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、2ページあります。なお、下書き用紙が2枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず黒鉛筆（シャープペンシルも可）で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

問題訂正

○訂正内容

教科名 小論文

頁・問題番号・行 2ページ 本文下から4行目

誤)

わからいのです

正)

わからないのです

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(配点 100 点)

つい数年前まで、私は宮城県のネットトヨタ仙台で営業マンをしていました。私がいたのは輸入車の販売部門でフォルクスワーゲン車を担当していました。家庭では 2 人の娘に恵まれ、仕事も順調でこれといって不満もなく、普通の人生のはずでした。それが 39 歳のときに激変したのです。

2014 年 4 月、大学病院で 1 ヶ月ちかい検査の結果、アルツハイマー病の初期と診断されました。

「嘘だろ?!」

「なんで 39 歳の私が認知症なんだ!」

怒り、落胆、後悔、そんなものがない交ぜになって、うつ状態になったこともありました。未来に向かって歩いていた私の道が、突然目の前で深い闇に変わったのです。

診断当初は、ベッドに入ると自然に涙がこぼれてきました。診断される 5 年ほど前から物忘れがひどくなっていたため、ノートに書くことで対応できるようにしていたから、記憶が悪いことへの不安ではありません。これから自分はどのようになっていくのだろうか、いつまでこのままでいられるのだろうか。未来への漠然とした、それでいて重苦しい不安でした。

でも今は、あの時よりも記憶は悪くなっていますが、いつも元気で笑顔でいられます。なぜでしょうか。

それは、希望を持つことができたからです。きっかけは、「認知症の人と家族の会」(以下、「家族の会」)で行った本人交流会への参加でした。それは、認知症当事者が、他の当事者や家族と出会い、交流をする場でした。

不安をかかえていると、周りから「大丈夫だよ」とか「頑張りなさい」と言われても、「私の気持ちがお前らにわかるはずがないだろ、認知症になったこともないのに」と、つい反発してしまいます。私もそうでした。でも、当事者と話をすると同感することが多く、同じ悩みをかかえていても元気であることができるんだと知ったのです。「家族の会」で、私より前に不安を乗り越えた当事者と会った時がそうでした。

その方は、家族に対していつも明るく笑顔で接していて、行動力があってやさしい人でした。そのうへ驚いたことに、自分が認知症であることを周囲に話して理解してもらえるようにしていたのです。

あの頃の私は、いきなり認知症と診断され、私と私の家族はこれからどうなるのだろうと不安でいっぱいでした。それが、その人と接しているうちに、なぜ自分はこんなに落ち込んでいるんだろう。自分の方が若いのに「負けた!」と思ったのです。私も頑張ってこの人のように、周りの人たちを笑顔にできる人になりたいと思いました。あの人に負けたくなかったからかもしれません。

「家族の会」に行くと、「丹野くん、なんでそんなに笑ってられるの?」と聞かれることがあります。そういう時、「記憶が悪いけど、普通だからさ〜」と言うと、「自分が暗くなっているのがバカみたい」と言って明るくなる方もいます。とくに初めて来られた当事者の方たちと話をさせていただくと、だんだん顔つきがやわらかくなっていくのがわかるのです。何かを感じてもらえるのでしょうか。認知症当事者にしかわかり合えないものがあるのかもしれない。私も同じ当事者と出会うことで元

気をいただき、前向きになることができたのです。それなら、いつか私も、不安で困っている認知症の仲間がいたら助けることができるんじゃないかと思うようになりました。

それにはまず自分の病気をオープンにすることです。

認知症の当事者やその家族ならだれもが感じていると思いますが、認知症という病気のことについて他人に話をすることは非常に勇気がいります。でも、考えてみると、なぜ認知症が言いつらい病気なのでしょう。なぜ恥ずかしいと思うのでしょうか。風邪やインフルエンザなら笑って言えるのに、認知症は病気をオープンにすることですら勇気が必要なのです。それは、認知症に偏見があるからだと思います。

私は認知症と診断された時、やがて自分自身が壊れていき、普通の人間ではないヘンな人になっていくというような間違った情報に惑わされていました。多くの人は今もそう思っているはず。ひどい場合は、認知症の初期でも何もわからなくなり、ときには暴れて人に危害を加えたり、徘徊したりすると信じているのです。初期は、記憶が少し悪いという以外、これまでの日常生活と何も変わりません。でも当事者にすれば、そういう偏見が根強くあるため、周りから何を言われるのだろうか、どう思われているのだろうかと考えてしまい、思ったことを行動に移そうとしても反射的に躊躇してしまうのです。そのことが当事者だけでなく、家族や周囲の人たちを縛ってしまうでしょう。

でも、私は思い切って病気をオープンにしました。結果的にオープンにしても、偏見を感じることはほとんどないし、逆にサポートしてくれる人たちがたくさんできました。そのことから私はこう思ったのです。偏見は自分自身の中にあるのだ、と。

先ほど、認知症になると徘徊したり暴れたりするといった情報が蔓延していると述べましたが、これは、ひと口に認知症といっても、初期と重度はまったく違うことを理解していないからなのです。間違った情報があふれている中で、いきなり認知症と言われたら、不安で不安でいたたまれません。

「じゃ、どうしたらいいですか」と聞いても、何も教えてもらえないし、まず、何をどうすればいいのかもわからないのです。私がそうでした。このとき、間違った情報は、本人や家族を不安に陥れるだけでなく、うつなどの病気にしてしまうのだと思いました。このままでは、これから認知症と診断される人や、記憶が悪くて悩んでいる当事者たち、そしてその家族がおかしくなってしまいます。私のように不安で毎日涙を流していた時期をなくしたいと思うようになりました。

(丹野智文『丹野智文 笑顔で生きる 認知症とともに』, pp.10-15, 文藝春秋, 2017年より, 一部改変)

問1 下線部「認知症に偏見がある」とはどのような偏見か、またその偏見により当事者にどのような影響があるのか、筆者の見解を本文に即して200字以上250字以内で説明しなさい。

問2 認知症を周囲にオープンにすることに対するあなたの考えを600字以上700字以内で述べなさい。